



二彩小壺 (外面)



三彩小壺 (外面)



二彩小壺 (内面)



三彩小壺 (内面)



佐波理垂飾



遺物出土状況

千葉市種ヶ谷津遺跡

—奈良時代の特殊遺物について—

百瀬 幸徳
立和名 明美

1. はじめに

種ヶ谷津遺跡は、昭和56年に千葉急行線建設工事に伴い、昭和58年に県道生実本納線道路建設工事に伴い、過去2度にわたる発掘調査が実施されている。平成5年度の調査は県道生実本納線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の継続事業であり、昭和58年度に発掘調査を実施した隣接地域2,100㎡分の調査である。昭和58年度の調査では、奈良時代の遺物の包含層が確認され、その中から三彩陶器・鉄製儀鏡などが出土している。

今回の調査では、前回検出された遺物包含層の続きを調査し、同様に、三彩陶器・金属製品などが出土した。これらの遺物は奈良時代の良好な一括資料として注目される。ここに本誌上を借りてその一部を掲載する次第である。

2. 遺跡の環境と基本層序

種ヶ谷津遺跡は、村田川水系の赤井支谷を北側に臨む台地上にあり、標高は20～30mである。台地は所謂舌状を呈しているが、台地中央から徐々に高度を減じ、台地先端との比高は10m近くある。調査区は、舌状を呈する台地の北側縁辺部である。

種ヶ谷津遺跡との関連が考えられる同時代の遺跡として北側には、榎作遺跡、また南側には、大道遺跡、有吉遺跡、高沢遺跡などの遺跡が存在している(第1・2図)。なお、本遺跡の標準的な土層として、調査区F地点の南側土層断面を掲げておく(第3図)。今回三彩陶器等が出土した土師器・須恵器の包含層は、F地点では確認されたが、E地点では確認されなかった。土師器・須恵器は、表土上でも若干確認することができたが、ここであげている土層断面の1層、2層に集中しており、3層では、ほとんど見ることはできなかった。

3. 出土状況

今回の調査で包含層が確認されたF地点では、

990㎡を発掘し、整理箱で土師器・須恵器130箱、鉄製品7点(接合後5点)、鉄滓2点、銅製品11点(うち5点は同一個体か)が出土した。調査方法としては、最初にトレンチを入れた段階で、包含層が確認できたので、機械で表土約10～15cmを除去し、1層より、ジョレンで徐々に掘り下げていく方法をとった。出土した遺物に関しては、原則としてマッチ箱以上の大きさのものはすべて図面上に、ドットを落として記録を取った。その結果、F地点では、谷の落ち込みの手前まで、ほぼ全域で包含層が確認されたが、その中でも遺物が著しく集中している地点が3か所見つかった。そのうちの1か所は、古墳時代後期の住居が埋まった窪地の上に、多量の遺物が堆積している状態であった。(カラー図版)なお、この集中地点からは、多量の土師器・須恵器の他、三彩陶器、佐波理、鉄製儀鏡などが出土している。昭和58年度の種ヶ谷津遺跡の調査でも三彩陶器が、古墳時代後期の住居の覆土上層で出土している。また、もう2か所の集中地点の下からは、住居跡は見つからなかった。

4. 遺物紹介

奈良三彩 (第4図1～3)

今回の調査では、三彩及び二彩陶器が3点出土した。うち2点は小壺の蓋で、一方に多少の破損が見られるが、ほぼ完形。残り1点は小壺の胴部片である。

1は二彩小壺の蓋である。口径4.8cm、器高1.6cmを測り、丸く、いびつな球状のつまみを持つ。蓋上面は平坦で肩は丸く下がる。胎土は比較的精良で、焼き上がりは良好、胎色は白褐色を呈す。釉薬の発色は、緑釉は明るく透明釉のかかる部分はやや薄緑がかっている。出土当初は、長い間土中に埋まっていたために、釉薬の表面のガラス質が変化し、光沢を示す部分はわずかで、全体にざ

らついたもので被われたような状態になっていた。内面は透明釉がかかり部分的に釉薬が禿げている部分があるものの、美しい光沢がみられる。中央には、焼成時に付着したものをはがしたために、釉薬が剝離した痕跡がみられる。

2は三彩小壺の蓋である。口径4.5cm、器高1.4cmを測る。低い擬宝珠型のつまみが付き、外面はロクロの痕が顕著で、やや角張った肩をもつ。胎土は非常に精緻で、かなり堅めな焼き上がりになっている。胎色は1に比べてより白色に近い色を呈す。釉薬の発色は、外面の緑釉部は薄緑色を、透明釉の部分は灰色を呈す。褐釉部分は3か所に観察され、鈍い光沢を示すが、褐釉以外の部分では光沢がかなり薄れている。これは1のように土中で起きた釉薬の変化に因るものではない。蓋の立ち上がり外面には、釉薬が高温のため泡だって焼け付いている部分が見られる。このことから、焼成時にやや高すぎる熱を受けていたことが解る。釉薬全体の光沢が薄れているのはこのためで、焼き上がり時にはすでに現在の釉調であったと思われる。これに対し、内面は灰色だが光沢のある透明釉が全体に見られ、中央部には、張り付いた円筒状のものを剝した痕跡が見られる。

この痕跡は1・2ともに観察される、本来直径2cmほどの円筒形と見られ、焼成時の焼き台の一種であろう。1では部分的に釉薬が剝離しているのに対し、2に付いた痕跡では、焼き台と思われるものの胎土が逆に付着している。

3は三彩小壺の胴部片である。復元口径3.6cm、体部最大径は約7cmと推定される。肩が丸く張り、器高に対して径の大きい形態を示すと思われる。口縁部はやや垂直に立ち上がり、端部はわずかに内傾する。胎土は比較的精良で、焼き上がりは普通、胎色は白褐色を呈す。ごく小片で釉薬もかなり剝離しているため、緑釉部とやや薄緑色の透明釉部分がわずかに確認されるのみで、褐釉部分は見あたらない。二彩陶器の可能性も考えられる。釉薬が観察される部分は光沢が残っている。

佐波理 (第4図4～6)

きわめて薄手の青銅製品3点が出土した。1点は台形状の垂飾品、他の2点は一部に縁辺部を残すものの、原形の復元が困難な断片である。

3点ともに、表面には、光沢があり、かつ、通常の青銅製品には見られない細かい模様(銅系の

金属の色を呈する地の細かなひびに、緑青がはまり込んだように見える)と、不定方向の擦痕が全面に観察される。全体に湾曲しており、凸面側は凹面側よりも光沢を持つ。凹面はやや黒みを帯びている。材質についてさらに検討を要すと判断されたため、国立歴史民俗博物館の永嶋正春氏に調査・分析を依頼したところ、佐波理と判断される旨、ご教示をいただいた。

4は、最大幅2.9cm、高さ2.98cm、各辺がわずかに弧を描く。孔径2mm、厚みは0.55～0.7mm、現存重量3.04g。ほぼ完形であるが、周縁部には傷みが見られる。また、凹面側、上辺と孔のあいだに、上辺の弧とむきあう弧状の沈線が1.7cmほど見られる。他の2点(5・6)も、肉眼で観察される特徴は、4に同じであるが、5は他の2点に比して凹面が黒みを帯びていない。5は現存重量0.63g、厚み0.35～0.45mm、6は現存重量0.62g、厚み0.4～0.5mm。

3点ともに、鏡などの佐波理製品の破片を再加工したものである可能性が考えられる。しかし、ろくろびきの痕跡は確認できない。なお、このほか、湾曲から鏡などの破片と考えられる青銅製品断片5点が出土している。上記3点よりもやや厚手(0.5～0.8mm)であるが、緑青が吹き出しており遺存状態は良くない。しかし、部分的には、凸面側に光沢を持つところも残っていて、前述の資料と共通の特徴をみることが出来る。また、凹面側は黒みを帯びている。未分析であるが、これら5片についても佐波理の可能性が考えられよう。

鉄製儀鏡 (第4図7)

径4.14cm。一部欠損箇所はあるが、ほぼ正円に近く復元される。鈕は確認できない。厚さ1.2～1.3mmの鏡面は、中心・周縁間に高さ2mmの反りがある。現状では、凹面側の二カ所に突出部があるが、表面の一部が錆により持ち上がったものとみられる。凹面側の中心部に径2mmのくぼみがあり、孔の可能性も考えられるが、凸面側の該当部分には孔が錆でふさがれたような痕跡を確認できない。別づくりの鈕が剝離した痕跡である可能性を含めて今後調査をすすめたい。現存重量7.20g

その他

青銅儀鏡1点、銅鈴2点、鉄鏃片3点、棒状鉄製品1点、鉄滓2点、土製品断片1点、球状?炭化物1点



第1図 遺跡全体図 (1:5,000)

5 おわりに

今回、報告した遺物を見ると、祭祀的性格のみが強調されている。しかし、今回取り上げた遺物は全体の構成のごく一部にすぎない。一括して出土した多量の遺物の中には、土師器甕等の煮沸具も多くみられ、単に祭祀的なものにとらえるだけでなく、十分な検討が必要である。今後の整理では、遺構の性格をより鮮明にするために様々な方向からのアプローチをおこなって行きたい。

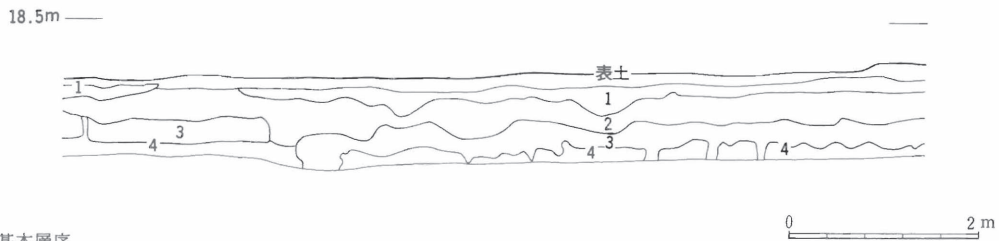
なお金属製品については、大久保奈奈氏に執筆をお願いした。末筆ながら、本報告をまとめるに当たってご指導、ご協力をいただいた調査員各位に感謝の意を表します。

参考文献

- 1985 千葉市種ヶ谷津遺跡県道生実本納線道路工事に伴う埋蔵文化財報告書 (財) 千葉県文化財センター
- 1988 寺家遺跡発掘調査報告II 能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書VII 石川県立埋蔵文化財センター
- 1989 千葉市種ヶ谷津遺跡 千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書III (財) 千葉県文化財センター
- 1993 西隆寺発掘調査報告書 奈良国立文化財研究所40周年記念学報第52冊 奈良国立文化財研究所



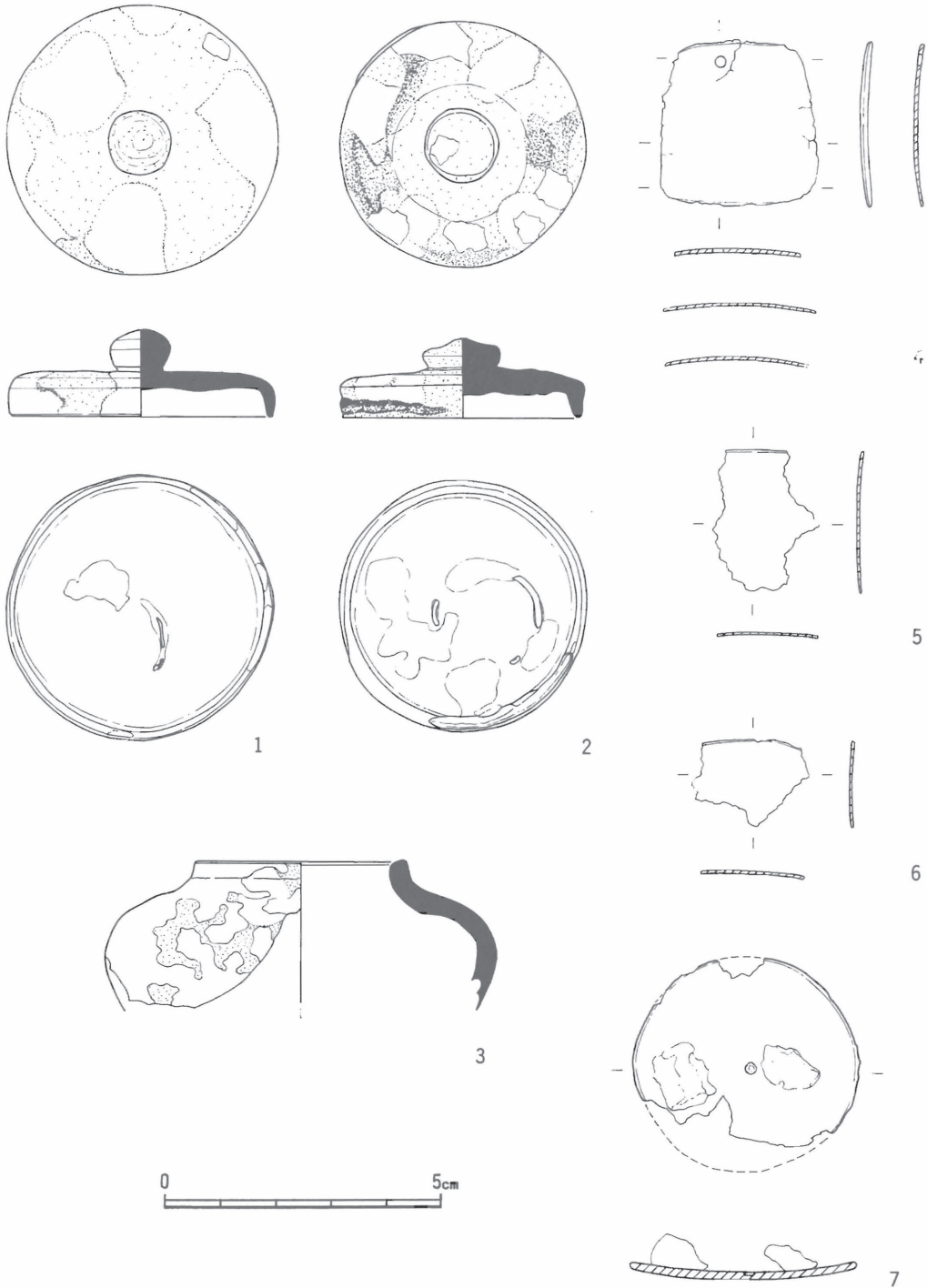
第2図 遺物集中地点図 (1:1,000)



基本層序

| | | |
|----|------|--|
| 表土 | 暗褐色土 | しまりなし。 粒子が細かく粘性あり。 |
| 1 | 褐色土 | 場所によっては明るくなりチョコレート色に変化してくる。 谷の末端部(北東側)に多く見られる。 |
| 2 | 暗褐色土 | 茶褐色の土に黒土がまだらに入る。粒子大きくブロック状である。全地点で、ほぼ安定的に認められる。 粒子大きくブロック状である。粘性あり。 |
| 3 | 黒褐色土 | 地点により黒みが増す。確認できない地点もある。 ほとんど遺物を含まない。 |
| 4 | | ソフトロームの上面 |

第3図 種ヶ谷津遺跡基本層序



第4図 出土遺物